

(参考資料) 『学び』の選択肢拡大に向けた検討懇話会」における  
地方創生に向けた教育についての主な意見

(1) 課題認識

(郷土教育のあり方)

- 若者の地域外流出は小学校からの教育の一つの総決算だ。学力の高い子ほど外へ出る傾向がある。自己の可能性に挑むのは立派な選択だとしても、子どもが「自らの共同体を守り発展させる」ことに目覚める教育をいかに形成すべきかを今、考えなければならない。
- 小学校には地域学習の機会が多くあるが、中学、高校と進むにつれ、その機会が徐々に減っていくという課題がある。

(教育者等の姿勢)

- 地方創生に向けて地域の方々が懸命に取り組んでいる中、三重県の教育者は、それに対しどれだけ真剣に向き合っているか。今、教育者の姿勢が問われている。
- 問題なのは、自分たちが地方に対して自信や誇り持っていないこと。子どもたちは地方に何があるのかを知らない。教える側も教科書的に教えるのではなく、誇りを持って教えないと、子どもたちには伝わらない。

(学びの選択肢の問題)

- 例えば県内の女子サッカーの中学生チームは四日市が全国的に強いが、高校がないため、選手たちはほとんど県外に出ていく。それを止める方策が必要である。

(2) 今後の基本的な取組方向

(教育全体の方針の確立)

- 地方創生に向けた教育は、あり方やぶれない方針、いわば「教育の三重ブランド」をまなず柱に据えるべき。

(郷土教育の方向性)

- 子どものものの見方、行動様式を形成する根底にあるのは歴史、文化、伝統である。そうしたものに早くから気づき目覚める地道な教育活動が、郷土愛、祖国愛につながる。生き方の根底をなすものに目を向け、子どもの行動パターンや考え方につなげていきたい。

- 郷土愛をきちんと教えることが一番重要である。郷土愛は、学校に通う道程で、四季折々の変化を感じたり、地域の人たちと挨拶をしたりする中で育まれる。子どもたちはそこを立脚点として自分の概念を広げていくことに留意したい。
- 地域の強みを大事にしたい。三重県は人の役に立ちたいという子どもたちの割合が全国平均より高い。こういう強みをもっと掘り起こし、子どもたちに自覚させる。そのためには、まず大人が地域の良さや強みを自覚する必要がある。
- 地方創生のキーポイントは、若者から見て「地域に活躍する場がある」ということである。役立てる場があるということを実感すれば、子どもたちは地域に残る。「どうすれば子どもたちが活躍できるという気持ちになるか」という観点から、取組を検討したい。
- 地域の魅力については、大人が見つけたことを押し付けるのではなく、子どもたちが自分で発見し、人に伝えたいと思うようにサポートしたい。
- 町同士の交流や、県外、海外との交流など、他地域との多様なつながりを持つことが重要である。外部の目があるからこそ三重県の良さがわかる。
- 子どもが地域の文化活動や奉仕活動に家族で参加する機会を増やしたい。また、三重県の持つ自然環境、歴史的・文化的資源をいかにして生かすかという課題を子どもにぶつけてみたい。地方創生には今の大人が気づいていない着眼が必要である。
- 小学校、中学校、高校を通じて、三重県の素晴らしさを子どもたちに伝え続けていくことが重要である。

### (3) 具体的取組の提案

#### (郷土教育)

- 学校教育の中に地方創生に向けたプラスアルファを入れる工夫をしたい。自分が教わった先生は熱心であり、地域の老人ホームで高齢者と交流したこと、神社仏閣を何度も訪れたこと、地域に関するレポートを提出させられたことなどが記憶に残っている。
- 祭を復活させ、地域活性化と郷土愛の育成を図ってはどうか。祭には役割分担があり、地域の人々の中で教えあう関係が生まれ、子どもたちも急激に成長していく。コミュニティのつながりも強くなる。
- 祭の日には学校を休みにするなど、祭を支援すべき。祭の効果は絶大で、家族が大集合し、そろって練習にも参加する中で、地域の熱気やリズムが子どもたちに伝授され、地域の誇りを生み出していく。
- 地域をテーマにした小学生向け学習プログラムを企業と共同で開発し、小学校に提供してはどうか。テーマは三重に関係の深い「自然」、「ものづくり」、「エンターテイメント・商業」、「食」などが考えられる。キッザニアがヒントになる。
- 三重県にどういう人材がいて、地域資源があるのかをきちんと教える教材を作ることが重要である。小学校、中学校、高校と発展させていくことを想定して作製する必要がある。
- 地域資源の解説は、物語性が重要である。表面的な説明は、記憶に残らない。例えば松浦武四郎のことを、単に北海道の名付け親というだけではなく、吉田松陰が何回も足を運ぶような立派な人だったということをストーリーとして子どもたちに伝えたい。

#### (アントレプレナーシップ教育)

- 小学校からのアントレプレナーシップ教育のカリキュラムを作り、すべての学校で、総合的な学習時間を活用して取り組んではどうか。
- 「都会に出なければ仕事がない」ではなく、地域にあるものに着目し、それをどう強みに変え、仕事や社会貢献につなげていくかを考えさせたい。例えば農業でもICTを活用し、英語力を身に付ければ、世界を相手に活動できる。

### (幼稚園、小中高等学校の特色化)

- 長野の「森のようちえん」的な、三重ブランド幼稚園を開設してはどうか。「自然体験」や「グローバル教育」等で特色化を図ることが考えられる。
- 学校の統廃合を機に寄宿舎付の学校をつくり、日本版（三重県版）のパブリックスクールとして、リーダー人材を育成してはどうか。
- 国際バカロレア認定校、女子サッカーの名門校のような、シンボリックな学校をつくってはどうか。

### (高等教育の選択肢の拡大)

- 工学部の情報学系で養成している情報科学の人材のみではなく、ウェブデザインや映像・音響デザイン、ゲームクリエイター、情報セキュリティ、統計分析等を担う文理融合型の情報科学、情報デザイン人材を養成する高等教育の拠点を県内に形成してはどうか。
- 三重県には高等教育の場として外国語学部・学科がない。グローバル化が進む中であり、企業・行政・教育機関が一体となって支援する体制が構築できれば、外国語学部・学科を創設し維持することも可能ではないか。
- 三重県の特徴を生かした産業振興と人材育成、大学収容力の向上等を図るため、アメリカのCIAを模範として、「食」を学問・技術の両面からアプローチする大学院大学を設立してはどうか。新規設立が難しければ、県内大学が協力するかたちも含めて検討したい。